

名著
全集

近代文学館

作品解題

——大正期——

日本近代文学館

名著
複刻
全集

近代文学館

作品解題

——大正期——

日本近代文学館 編集

名著複刻
全集



近代文学館 作品解題

——大正期——

昭和四四年四月一日 印刷

昭和四四年四月一〇日 発行

編集 名著複刻全集・編集委員会

代表者 稲垣 達郎

刊行 財団法人 日本近代文学館

東京都目黒区駒場四一三一五五

代表者 伊藤 整

製作 株式会社 図書月販

東京都新宿区市ヶ谷本村町三九

代表者 中森 詩人

印刷 東京連合印刷株式会社

東京都千代田区麴町三ノ二

代表者 長尾 義輝

「名著複刻
全集」

近代文学館」刊行について

日本近代文学館は、明治以来今日まで百年にわたる日本の近代文学の名著を初版により複刻し、「名著複刻全集・近代文学館」として刊行することとなりました。

明治以来何度もの戦争・災禍を経るなかで、日本の近代文学は、現代の思想・文化の発展に寄与する幾多の作品を残してきましたが、これら名作・名著は著しく散逸し、とくにその初版は愛書家・研究家でさえ閲覧することのできないものが数多くあります。

近代文学館では、著作者・版元その他多数関係者の協力と図書月販の絶大な支援を得て、これら日本文化の遺産である名作・名著を、それが刊行された元の姿で正確に複刻・再現することによって、学校教育の生きた教材を提供し、併せて研究者に頒布することにより、日本文化・日本文学の研究に資し、その発展に役立てたいと考えるものです。

財団法人 日本近代文学館

全集編集委員

伊藤 整	稲垣 達郎	小田切 進	木俣 修	塩田 良平	瀬沼 茂樹	成瀬 正勝	福田 清人	吉田 精一
------	-------	-------	------	-------	-------	-------	-------	-------

凡 例

(解説者)

解説・解題執筆者の氏名は、各解題の最後に記した。

(配列・見出し)

①解題の配列は作品刊行年順とした。

②各解題の見出しは、著者・作品名・刊行年・出版社の順とした。

③見出しはすべて初版底本どおりの漢字を使用した。

④見出しの著者名は通称を用いた。『當世書生氣質』は「春のやおぼろ」、「小説神髓」は「坪内雄藏」となるところを、「坪内逍遙」で統一した如くである。

⑤中見出しは原則として、(ア)その人と文学、(イ)作品の成立・初出の経過・初版解説・異本について、(ウ)その内容、(エ)意義、(オ)初版の反響・エピソードの順としたが、執筆者の解説に準じ、多少の変更がある。

(文字づかい)

①本文は現代かなづかいを採用した。

②引用文は作品そのままの用字づかいに従った。

③旧漢字で難しいものにはできる限りルビを付した。

(生没年・年代表記)

①著者および主要人名には、原則として日本年号による生没年を記し、西暦を併記したものもある。

②初出作品には、原則として発表または刊行年・月を付した。

③年代表記は和数字を用いたが、万千百十の単位数字は使用していない。

(作品表記・記号その他)

①単行本および発表されたすべての作品名は『』を用いて表わし雑誌・新聞等逐次刊行物は「」を用いて表わした。

②作品からの引用文は全て「」でくくり、文中の「」でくくった会話等はそのままとした。長文にわたる引用文は行がえした。

(複製注記)

複製についての注記は複製版の底本および使用用紙等に重点をおき、「複製について」として各解題末尾に付載した。

目次

大正期展望

石川啄木・悲しき玩具

北原白秋・桐の花

竹久夢二・どんたく

夏目漱石・こゝろ

木下利玄・銀

里見 淳・善心惡心

芥川龍之介・羅生門

萩原朔太郎・月に吠える

永井荷風・腕くらべ

瀬沼 茂樹

久保田正文

木俣 修

長田 幹雄

小田切 進

木俣 修

野口富士男

三好 行雄

伊藤 信吉

成瀬 正勝

(1)

(14)

(18)

(22)

(25)

(30)

(33)

(37)

(41)

(46)

志賀直哉・夜の光

有島武郎・生れ出る惱み

室生犀星・抒情小曲集

武者小路實篤・新しき村の生活

佐藤春夫・病める薔薇

有島武郎・或女

宇野浩二・藏の中

葛西善藏・子をつれて

島木赤彦・氷魚

廣津和郎・作者の感想

菊池寛・藤十郎の戀

佐藤春夫・殉情詩集

小川未明・赤い蠟燭と人魚

中勘助・銀の匙

濱田廣介・棕鳥の夢

長與善郎・項羽と劉邦

紅野敏郎

安川定男

中野重治

紅野敏郎

高田瑞穂

瀬沼茂樹

渋谷驍

浅見淵

久保田正文

稻垣達郎

藤木宏幸

井上靖

上笙一郎

福田清人

滑川道夫

岩淵兵七郎

萩原朔太郎・青猫

寺田寅彦・冬彦集

近松秋江・黒髪

宮澤賢治・春と修羅

宮澤賢治・注文の多い料理店

野上彌生子・海神丸其他

堀口大學・月下の一群

釋 遼空・海やまのあひだ

眞山青果・平將門

志賀直哉・老人（自筆原稿）

複刻制作の概要

大正期年表

篠田 一士

谷沢 永一

吉田 精一

中村 稔

恩田 逸夫

瀬沼 茂樹

河盛 好蔵

山本 健吉

秋庭 太郎

遠藤 祐

編集部

(158) (156) (154) (150) (146) (142) (137) (133) (129) (125) (122) (118)

大正期
展望

大正期の位相

大正期は近代日本の大きな曲り角である。殊に第一次世界大戦（大正三―七）がおこり、その終りころにはロシアに十月革命（大正六）があつて、共産主義が夢ではなく、地上に初めて根をおろすといった画期的な事件をみた。大逆事件を口実にして窒息させられていたはずの社会主義は、この大戦に米国の参加する名目にとりあげられた民主主義思想の高潮とともに、蘇生し、戦争にともない大きくなった社会矛盾、それによる経済恐慌に拍車を駆けられ、老いた山県有朋を苦しめ、ついに没するにいたるまでに「妖怪」的存在を、日本の中に確実にしめた。戦後の文学はかかる社会不安と分化とに対応して、この時代精神を現わし、昭和文学の展開へと移つていったのは当然である。

大正期は世界大戦を境として二分せられ、前期は明治の延長であり、後期は喧しい昭和の序幕であるともみられよう。したがって、前期には漱石、鷗外、自然派が完成期に入つて代表的作品を残すとともに、漱石門下の哲学者、思

想家たちによる大正教養派の抬頭、白樺派の成熟、鷗外・柳村（上田敏）周辺の唯美派の開花等がみられる。後期には前期の大杉栄らの一派に代わつて社会意識の拡充からプロレタリア派を生むと共に、新思潮派、三田派、新早稲田派と呼ぶような個性的分化を強め、新たに大衆文学を派生した。こうしてプロレタリア派と新感覚派の競合といわれる初期の昭和文学が生誕をみせる。

大正期の文学は、一口にいつて、日本の近代文学の完成期であると同時に、分化と解体期であるとも考えられる。この過渡の様相にこそ問題の多様性がふくまれ、近代文学の完成の仕方に分化と解体の方向がさだめられていたとみれば、大正文学の重要性もまたおのずから明らかである。

鷗外・漱石とその周辺

明治天皇の崩御、乃木希典夫妻の殉死は明治の終焉しゅうえんを告げる劇的事件である。森鷗外はこのショックに『興津彌五右衛門の遺書』を書いて、歴史小説に転じ、封建武士の意志の人間の核心である意地の諸相をさぐりながら、近代的



右は暁星の詩稿。左は朔太郎が寄せたあつき原稿
『愛の詩集』稿本より。

との二重の方向である。

漱石の門下からも、鈴木三重吉、森田草平らが出て、唯美派と共通する。しかし鷗外・荷風系の唯美派には、無反省に放縦に走る享樂的傾向が強いとすれば、漱石系の唯美派は浪漫的憧憬の追蹤する理想のつた姿態であったといえよう。三重吉は、第二の長編『桑の實』において、長い心の漂泊の末にとらえた理想の女を静かに描き、繊細な感覚と技巧とで磨きあげる。やがて『八の馬鹿』を描いて、一〇年の作家生活に終止符をうって、童話に転ずる。大正

るものに結びつこう。
白秋と結んだ萩原朔太郎、室生犀星らの感情詩派は、前者の『月に吠える』、後者の『抒情小曲集』、『愛の詩集』をもつて、孤独や倦怠の近代意識の官能的表現と人道への思念にみちた純情な口語的表現

七年七月、「赤い鳥」を出し、明治期の巖谷小波の教訓主義から脱した近代童話への道をひらいた。小説から転じた小川未明、或いは浜田広介は、この線に、登場してくる。
森田草平は平塚雷鳥との恋愛事件を『煤煙』等を書いて、三重吉らと同じ新浪漫主義といわれたが、『煤煙』に先立つ時期の自伝『輪廻』を書いた。三重吉の情緒的であるのに対し、理想的傾向をもっている。ついでにいうと、漱石門下から思い出風な追憶小説『銀の匙』をもつて現われた中勘助を見のがすことはできない。詩人的稟質で随筆風の作品を多く残した。『銀の匙』は出版こそ後れたが、大正前期を飾る、香気高い作品である。

白樺派と教養派

大正前期の中心は、なんといっても、白樺派である。逆にいうと、白樺派は、第一次世界大戦と時期を同じくして、最盛期をむかえ、文壇の人気をひとり背負ったかの感のみせる。自己を生かすことを信条に、自分の書きたいものを書くといつて、雑誌「白樺」を舞台にしていた彼ら

が、文壇の主流になり、綜合雑誌の花形作家となった。これは、その唱える自我主義、天才主義、人道主義、世界主義が大戦にともなう経済的繁栄に助けられて、八方通達の観をみせたからである。武者小路実篤は『わしも知らない』、『三和尚』、『人間萬歳』等の諷刺劇から、『その妹』、『或る青年の夢』等の思想劇、『幸福者』や『第三の隠者の運命』のような思想小説、『友情』のような青春小説と、自己の思想を作品化する一方では、若い日からの夢を「新しき村」の理想郷の実現にふみきった。それは偉大な失敗であったかもしれぬが、東洋的自然主義の面目をもつて、トルストイから老荘の世界へと歩んでいる。

他方、志賀直哉もまた父との不和をモディファイしてすぐれた短編『清兵衛と瓢箪』とし、三年あまりの空白をへて、『好人物の夫婦』や『和解』の調和的な世界へとつきぬける。倫理的に潔癖に、人間性の美しい真実を、精細に写し、「日本的短篇の完成者」といわれるまでになった。かなり多様に短編をこころみており、やがて東洋的伝統に帰一するところがあった。だから大正・昭和の作家は志賀文学の権威にいどむことによって、自己の位置をきずこう

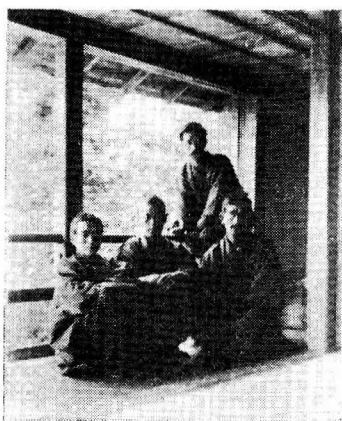
とする気配をみせた。

有島武郎は、実篤、直哉におくられて、『死と其前後』、『カインの末裔』等をもって現われ、『或女』に不朽の場所をしめた。実篤や直哉の個性主義が漱石の個人主義の人格的な面を継承し、その社会的な面への拡がりをもたなかったのに対して、珍しく社会性を思想としてみせ、この点において明治的でもあれば、また昭和的でもあった。しかも愛の極致に二元の統一をみる生の哲学（『惜しみなく愛は奪ふ』）は、『宣言一つ』における自己限定によって、辛うじて生かせるものであっただけに、結局、自己否定に赴かざるを得なかった。

かれらにつづいて重厚な長与善郎が『盲目の川』、『項羽と劉邦』のような強者意識をもった壮大な作品によって現われ、そのなかに含

「白樺」百号記念号





左より里見弴・武者小路実篤・志賀直哉・後ろは正親町公卿。

まれる多くの矛盾を世界観的に越えようとする『竹澤先生と云ふ人』に移ってゆく。こ

こにも究極において東洋的自然主義がみられる。有島生馬は『嘘の果』のような作品を残して、美術の世界に専心すれば、里見弴は『まごころ哲学』という処世哲学をうち出し、『善心悪心』から『多情佛心』へ、白樺派の本流からはみ出したところで、自己の作家的特質を発揮する。白樺派の歌人であった木下利玄の出発点は類唐風な『銀』であったが、やがて白樺派的な抒情歌に落ちつき、千家元麿の虚飾のない清純な詩風とも通ずるところをみせる。

白樺派の理想主義または個性主義は、一つには漱石の個人主義思想の継承によって、一つにはベルグソン、オイケン、タゴオルなどの理想主義の輸入と強調とによって、援

護をうけたといってもよからう。しかも、そこで活動した人たちは、主として漱石門下の哲学者、思想家たちであり、阿部次郎、安倍能成、小宮豊隆、和辻哲郎といったドイツ観念論によって哲学的思索を自己内観にむけた哲学青年たちである。阿部次郎の『三太郎の日記』、から和辻哲郎の『古寺巡禮』にわたる解釈学的な審美の世界への道は、大正教養派の淵源でもあれば、骨格でもある。小宮豊隆の伝統芸術の新しい解釈、寺田寅彦の自然科学者の観察眼をもつてする芸術的境地等の局面がみられる。やがてリップスによる阿部次郎の人格主義、或いはドイツ西南学派をもととした左右田喜一郎の文化主義、そして『善の研究』に出发した西田幾多郎が、その純粹経験を西欧思想との対決により「禅」体験の無の思想に究めて、西田哲学の確立と展開におもむいたこと等、すべてを通じて、汝と我との交りとは別次元の個人主義・世界主義であったところに、大正教養派の特色がある。

倉田百三が、「白樺」と結びつつ、『歎異抄』の教義を、一つにはキリスト教から、一つには西田哲学から嚙みくだいて『出家とその弟子』や『愛と認識の出發』とし、生の

形而上学を宗教的形象において描き、大正期の宗教的傾向を生んだ。自然派の島崎藤村の『新生』、田山花袋の『残雪』など、真摯な人生的態度の宗教的転回と時期を一つにし、宗教文学の流行をみた。なお、先に野上彌生子の登場があり、後に中条百合子の出現をみる女流文学の二大巨星についても、付け加えておこう。

社会思想と文学

大正期の文学の特色は、大正デモクラシによる社会意識のめざめによって、社会諸思想が文学思想として明確に存在し、プロレタリア文学に形成されていったことである。この端緒は大杉栄の「近代思想」の創刊にはじまり、民衆芸術論によって具体化され、小牧近江らによって、アンリ・バルビュスのクラルテ運動にならう「種蒔く人」の発刊となり、インタナショナルな運動へと飛躍していった。具体的には、自然自発的な民衆詩と労働文学が生まれ、前者に富田砕花、百田宗治、後者に宮島資夫、宮地嘉六が数えられる。そこで民衆芸術に階級意識を導入し、階級

闘争から「第四階級の芸術」、また「無産階級芸術論」が主張され、評論家としての平林初之輔、青野季吉が登場すれば、アメリカ帰りの前田河廣一郎、朝鮮に目をつけた中西伊之助らが現われ、藤森成吉、秋田雨雀もまたこの陣営に加わって、転換した。こういうものを地盤にして、プロレタリア文学が唱えられ、関東震災による大杉栄の虐殺を機とする無政府思想の圧殺とともに、マルクス主義——それも性急な政治的意図をもって、文学支配にむかっていた。

重要なことは、デモクラシによる社会思想の伸長と文学理論の組織とによって、社会改革と文学の転換とが要求されたとき、近代個人思想がその立場からする社会思想を明確にすることなく、人格主義、文化主義、教養主義に立ちどまって、

良心的な文学的知識人の心情に深い苦悩をもたらし、有島武郎のような自己限定

「種蒔く人」創刊号（土崎版）



から自己否定に走ったのを極点として、いちじるしい動揺をみせた点である。或るものは敢然と運動に身を投じ、或るものは橋の手前にとどまって、その苦悩とたたかった。大正末年からの文学の推移は、この座標によって、描かれてゆく。

「新思潮」の人たち

漱石晩年の門下で、白樺派の個人主義思想にある理想性よりも、現実性を尊重し、その楽天主義をかなぐり捨て、厭世主義に近づいていった一派がある。谷崎潤一郎を文壇に送り出した『新思潮』の後継者で、第三次、第四次と称され、潤一郎の第二次との世代の隔りがみせる開きがここでは理想と現実、楽天と厭世となって現われたと考えられる。即ち大正前期に対し、後期の性格が現われてくるのである。

芥川龍之介は早くから人生の虚偽を知り、憎んでいたが故に、懷疑と厭世の底から、芸術の中で、これを手玉にとる精神力に自己の誇りをみだしていた。恋愛にも現われ

るエゴイズム

を嫌悪して、

これを究める

がために、条

件を設定し

て、歴史にか

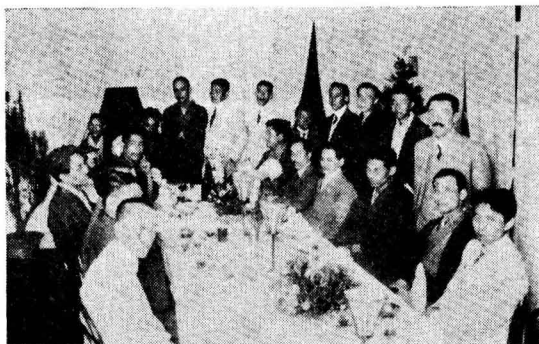
くれて、巧妙

で、寸分の隙のないシニズムを貫徹する芸術を好んだ。第一小説集『羅生門』から『傀儡師』、『影燈籠』と小説集を重ね、鷗外の『諸國物語』に倣う小説作法をもって、変幻を極める多様性を發揮した。しかし、機智と合理できずいた芸術至上の精神がいつしか足下に深淵をひらいた現実の前に、無力な敗北を味わわせられ、精神と肉体との衰弱に自決に赴いた。墮地獄の暗澹とした心象風景を、あくまでも芸術的気品をもって定着する『河童』等の悲痛な作品を残して去った。有島武郎の死に次ぐ芥川龍之介の死に、大正文学の終焉が意味深くひびくのである。

芥川龍之介と並んで、菊池寛もまた、合理的精神をもって、人間のエゴイズムを追求しながら、明確なテーマに拘

第三次「新思潮」終刊号





羅生門出版記念会（大正6年6月・鴻の巣にて）——左手前より龍之介・鉄雄・泡鳴・歌之介・氏名未詳・武羅夫・俊子・加藤某・春夫・渙・久保勘三郎・作次郎・稻森・生馬・勝衛・与志雄・桁平・瀧一郎。後列右奥から手前へ末雄・豊隆・哲郎・謙・正雄。

いあげて、健全な市民常識に終始するところとなった。アイルランドの民族劇に教えられた戯曲、『屋上の狂人』、『父歸る』、『藤十郎の戀』などを提示し、舞台効果をあげ、新鮮な気風を吹きこんだが、『忠直卿行狀記』、『恩讐の彼方に』などの小説は、感傷を去って、明快な人間解釈を描き、龍之介のように未知の深淵に苦悩するということがな

かった。だから、やがて久米正雄とともに通俗小説に筆をとり、雑誌経営にジャナリストの才腕を発揮し、この意味で文壇の大御所として知られた。

芥川や菊池

よりも早熟を謳われた久米正雄は、劇作家として社会劇で名をなしたが、所詮は通俗な常識家であった。短編集『學生時代』は受験生・一高・東大と三段階の学生生活を描いて、一時評判をとった。しかし菊池に先立って通俗小説に赴き、夏目家に出入して、その長女を同級の松岡譲と争って破れ、長編『破船』に書いた。しかしこの評判もモデルによるもので、微苦笑の「明るい文学」が賑かな社交家の話題を残したにとどまる。

山本有三もまた戯曲家として出発する。生物進化に出发する生存闘争の自然の理に、正義や善をもとめる道德的要求を対比しながら、そこに人生の必然の運命とこれに対する懷疑を『嬰兒ころし』、『生命の冠』、『坂崎出羽守』等に、劇的效果をもって描きあげる。この雄渾な筆は、現実に対決しながら、『生きとし生けるもの』から長編小説に赴き、昭和初期の人生問題と真剣にとり組み、漱石に比定されたこともある。彼らより先輩の豊島与志雄は、清澄な知性で、知性の限界を越える深淵にさぐりをいれ、抒情と幻想とで、多くの短編を書いている。短編集『生あらば』にはじまる自由な探求の仕方は、近代人の憂愁や倦怠をも